



# THE FRONTIER TIMES

[ザ・フロンティア・タイムズ]



ハーバード・MIT 体験プログラム参加に向けて (中面特集)



[ Embracing Diversity ]

In the next few issues, we will discuss some ways in which this school has committed itself to a cutting-edge international education for this new century. This first article is about our close study of the United World Colleges (UWC).

There are twelve UWC campuses in Asia, Europe, Africa, North America and Central America. The typical UWC has about two hundred to three hundred students in their last two years of senior high school. These students at each school come from an average of 85 countries. The majority of the UWC schools offer the International Baccalaureate curriculum, a curriculum to which this school has committed itself and which we will introduce in April of 2015. The IB is an all-English curriculum, with the exception of a mother-tongue (Japanese) course. We will introduce the IB Diploma Program in the next issue of The Frontier Times.

Kurt Hahn, a German educator, opened the first UWC in 1962. He also developed the well-known Outward Bound program. He founded the first UWC because of his experience at the NATO Defense College, where former World War II enemies were able to have productive dialogue, despite their former enmity. He had a vision of creating a series of schools where accomplished young people aged sixteen to nineteen from all over the world could gather and live and study in peace.

The UWC movement has garnered tremendous support from the world's elites. Past Presidents include Lord Mountbatten, Prince Charles and Nelson Mandela. Lester Pearson, the former Nobel Peace Prize winner, explained the UWC basic philosophy thus: **"How can there be peace without people understanding each other; and how can this be if they don't know each other?"**

We believe that it is imperative for schools in this country to expose young Japanese persons to people from as many different cultures, countries and human perspectives as possible. That is why we have developed sister school relationships and have established international programs in seven different countries; have invited students from Thailand, the United States and France to spend an academic year with us this year; and have nurtured a truly international faculty.



# Thinking about the Future

[国際生 OB OGから現役国際生へ]

● Message to Students ●

## 今、後輩達に伝えたいこと

2009年年度(普通科 中高一貫コース)卒業生  
立命館アジア太平洋大学 国際経営学部

市野 貴大君

### 「自分から動かなければ、何も生まれない」

2009年に第1期生として本校を卒業し、立命館アジア太平洋大学に進学した市野貴大さん。来春から大手広告代理店の博報堂への就職が決まり、本校の先駆者として社会へ歩み出す先輩から、後輩たちへのメッセージが届きました。

### 自分自身で考え、 行動することが大切

**私**は大学進学の際に、国際感覚を磨くことができる環境を重視しました。実は高校2年の時点でアメリカの大学への入学資格を得ていましたが、「日本のことも学ばなければ」という思いもあり、国際的な教育システムが整った立命館アジア太平洋大学(APU)に進学しました。APUの学生は半数以上が海外からの留学生。100以上の国や地域から個性豊かな面々が集まっています。講義はすべて英語で履修し、世界中にいる卒業生と在学



▲本校1期生として2009年に卒業。4月からは広告代理店の博報堂に勤務し、社会人として第一歩を踏み出します。

をつなぐイベントを企画する「校友会」の活動や、国際色豊かな寮での共同生活など、4年間の大学生活では日本にしながら国際感覚を養うことができました。なかでも「校友会」での経験は、現在の自分にとって大きな財産となっています。春からは広告代理店で働くことになりましたが、まったく違う考えを持った人が集まり、意見をぶつけ合う時に生まれる“エネルギー”の魅力に関わっていたいという思いは、就職活動でも大きな原動力になりました。内定をもらうまでは、イベント関連企業やIT企業など、自分が心から納得できる企業に出会うまで、とにかく積極的に動き続けました。電車のホームでイベント告知の看板を見て、その場で電話をしてその会社の面接のアポイントを取ったりもしました。就職活動では、自分自身で考えること、自分の気持ちに素直になること、積極的に行動することなど、これからの人生にもつながる、たくさんのことを学びました。

## 努力し続けられる 目標を見つけてほしい

**大** 学生生活や就職活動で自分を支えてくれた「積極性」と「行動力」。振り返ると、その基盤は名古屋国際で過ごした6年間に磨かれたのだと感じています。1期生ということもあり、私にとって中高6年間は真剣に話し合いができる仲間に囲まれ、切磋琢磨しな

がら互いに高めあうことができた時間でした。職員室で先生と話をする機会も多かったですし、皆が「フロンティア・スピリット」を持って、自主的に行動できる環境があったように記憶しています。私はテニス部に所属していましたが、ジョージ校長に直談判をして、部活の練習後に英語を集中的に学べる特別クラスを用意していただいたこともありました。たった一人の生徒の希望に、学校が応えてくれたことは本当に嬉しかったです。と同時に、自分で考え行動することの大切さ、喜びや達成感にも気づくことができました。「自分から動かなければ、何も生まれない」。現在の自分の礎になっている考えは、そうした中学・高校時代の積み重ねの上であり、これからも変わらず持ち続けたいと思います。OBとして伝えたいのは、「自分が本気で取り組みたいことを6年間で見つけてほしい」ということ。それは、人を頼りにしては見つかりません。素直な心で自分と向き合えば、きっと目標は見つかります。目標を見つけたら、とにかく行動に移すこと。たとえ志半ばで目標が変わっても、道はひとつだけではないし、積み重ねた努力は絶対に無駄にはなりません。私自身がそうだったように、名古屋国際の恵まれた環境を活かして、ひたむきに努力し続けられる目標を見つけてください。📌

# Feature

将来、国際社会で活躍する力を身につけるため、多彩な研修の機会が用意されている本校の国際教育プログラム。2月には、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学(MIT)で“世界一流の学び”に触れる新しいプログラムがスタートします。参加生徒たちに、直前の意気込みを聞きました。

## 「一流の学び」を体験！ ハーバード・MIT体験プログラム



▲「ハーバード・MIT体験プログラム」を前に、  
3名がそれぞれの意気込みや期待を語ってくれました。



▲毛利夏さん(中高一貫6年生)  
来春からはアメリカのGreen River Community Collegeに進学予定

## 一流大学の学びを 肌で感じる新しい試み

**TIMES:**『ハーバード・MIT体験プログラム』の概要について教えてください。

**橋本啓市先生:**今年から始まったプログラムで、ハーバード大学の学生にプレゼンテーションやディベートの指導を受けるなど、コミュニケーションの力を磨くことに重点を置いた内容になっています。ハーバード大は本校のジョージ校長の母校でもあり、アメリカを代表する超一流の大学。約10日間という限られた時間ですが、生徒たちには、同年代の学生と触れあい、「世界トップクラスの学び」を直に感じることで、それぞれの高校卒業後の学びにつながる、たくさんの刺激を受け取ってほしいですね。また、同

校があるボストン周辺はアメリカの建国に深く関わりのある土地でもあるので、アメリカの歴史についても講義や施設見学を通してしっかりと学べる内容になっています。

**TIMES:**それぞれの参加の動機を聞かせてください。

**毛利夏さん:**私は来春からアメリカの大学に進学することが決まっているので、ひと足先にアメリカの大学の雰囲気を知っておきたいと思ったことがきっかけです。

**吉田篤史君:**僕は大学でさらに英語力を伸ばしたいと考えていて、その準備段階として刺激が受けられればと思い参加しました。大学での学び方も事前に知っておきたかったですし、超一流の大学なので勉強法や学生の考え方など、少しでも多くのことを吸収できればと期待しています。

**渡辺麗来さん:**私はまさかハーバード大学で研修を受けられる機会があるとは思いませんでしたので、募集を知ってすぐに希望を出しました。卒業後は音楽を専門に学ぶ予定なので、一般の大学の雰囲気を経験したいという思いもありました。

**TIMES:**研修までの準備として、何か特別に取り組んでいることはありますか？

**橋本先生:**学校としては、ハーバード大学のことやアメリカの歴史に関する予習として、ジョージ校長から直々に講義を行っていただきます。ただ、高校卒業後の学びにつなげるのが研修の大きな狙いでもあり、事前の準備については、基本的に生徒たちそれぞれの自主性に任せています。

## プレゼンやディベートを 現地の学生が直接指導

**吉田君:**僕はインターネットで大学周辺の街並みを調べています。プログラムの前後に時間が取れば、自分の足でいろいろな場所を歩いて周りたいですね。

**毛利さん:**私はハーバード大学を卒業して「Facebook」を立ち上げた人の半生を描いた『ソーシャルネットワーク』という映画を観ました。大学の寮が舞台になったシーンでは、母と「ここに泊まるのかな」と話をしながら、イメージを膨らませています(笑)

**TIMES:** 学生寮に宿泊することも『ハーバード・MIT体験プログラム』の特徴のひとつですね。

**橋本先生:**従来の海外研修はホームステイが基本なのですが、今回の研修では実際の学生寮での宿泊を予定しています。アメリカでは大学生の多くが寮生活をしていますし、同年代の学生の等身大の生活を体験することも、生徒にとって貴重な財産になると思います。

**渡辺さん:**アメリカの大学生の生活って、すごく賑やかイメージがありますよね。寮で週末のパーティーをしたり(笑) そういう部分も楽しみです。

**TIMES:**10日間の間にさまざまなプログラム用意されていますが、それぞれに最も楽しみにしているものを教えてください。

**毛利さん:**不安も大きいのですが、ハーバード大学の学生にプレゼンテーションやディベートの指導をし

てもらおうことです。大学生になれば自分の意見を発表する機会もより多くなるだろうし、日本ではなかなか経験できないことなので貪欲に吸収したいと思っています。

**渡辺さん:**私はマサチューセッツ工科大学(MIT)のサイエンスクラスに参加すること。純粋に「世界トップクラスの大学の講義や実験ってどんな内容なのだろう」と、とても楽しみにしています。

**吉田君:**僕はアメリカ史学習ですね。実は年末にパールハーバーに行ったのですが、博物館で日本とアメリカの歴史的な関係を知って興味が湧きました。以前から戦争を経験した祖父に話を聞いていましたが、現地ではどのように考えられているか、いろいろなことを見聞きたいと思います。



▲ 渡辺麗来さん(中高一貫6年生)

## 将来につながる 人脈をつくりたい

**TIMES:**その他に楽しみにしていることはありますか？

**毛利さん:**友人をたくさん作りたいですね。

**吉田君:**僕も同じです。高校卒業後のステップにするという意味でも、大学や社会人になってからも関係を続けられる人脈を作りたい。

**渡辺さん:**これまでに経験した国際理解研修や海外語学研修とは違って、自分たちと年齢が近い人とコミュニケーションができるのは本当に楽しみです。

**橋本先生:**吉田君はドラム、毛利さんはクラリネット、渡辺さんはサクソと、君たちには楽器が得意だという共通点がある。音楽は英語と同じようにコミュニケーションのツールになるから、その“武器”を使ってぜひたくさん



▲吉田篤史君(中高一貫6年生)

の友人を作ってほしいな。

**渡辺さん:**私と毛利さんは楽器を持っていくつもりです。

**毛利さん:**現地でレッスンが受けられたら嬉しいです。

**吉田君:**さすがに僕は持っていけないけれど、マーチングバンドの演奏なども直接聞いてみたいです。

**橋本先生:**キャンパスの見学ツアーの時間もあるから、クラブやサークルの活動を見学したり、ひよっとして一緒に演奏させてもらえたら、すごく良い経験になるだろうね。

**TIMES:**最後に、研修に向けて意気込みをお願いします。

**毛利さん:**それぞれのプログラムに真剣に取り組んで、同年代の学生からいろいろなことを吸収してきます。自分から積極的に話しかけて、人見知りの性格を卒業することも個人的な目標です。

**吉田君:**大学はコミュニケーション学科に進むので、できるだけたくさんの人と関わることを課題にしています。いつかまたアメリカを訪れた時に、自宅に泊めてくれるような友人を作りたいと思います。

**渡辺さん:**私はとにかく積極的に話しかけて、たくさんの人と英語で話したいです。そのためにも、出発までに先生方に協力していただいて英語力を磨きます。

**橋本先生:**学生の時の失敗は今後の大きな力になるので、君たちには良い意味での“挫折”を経験してほしい。6年間の集大成、そして次のステップへの課題を見つけるために頑張ってください。期待しています👍



## STUDENT INTERVIEW

昨年7月に中国からの帰国生として名古屋国際中学校に入学した石下大輔君(中高一貫2年生)。約8年間を過ごした海外での思い出、そして本校での学校生活について、現在の素直な気持ちを話してくれました。

### 自分の意志で入学した インターナショナルスクール

**父**の仕事の関係で、僕は5歳から中学1年までの約8年間を中国で過ごしました。小学5年までは上海の日本人学校に通い、授業が終わると家族と過ごす時間が長かったので、海外で暮らしているという意識はあまりありませんでした。僕が中国にいたのは北京オリンピックや上海万博など、国際的なイベントが開催された時期でしたが、残念ながらどちらも見に行くことはできませんでした。特に上海万博は、僕たち家族が上海から青島へ引越をした後に開催されたのでとても残念でした。今思えば、日本で愛・地球博が開催されたのも僕が中国に渡った後のことでした(笑)それでも、日本人学校の修学旅行で北京に行ったり、レンタカーを使って家族といろいろな場所へ旅行に出かけたり、中国での生活には楽しい思い出がたくさんあります。

小学6年からは自分から希望して、インターナショナルスクールに通いました。きっかけは、学生時代にオーストラリアへ留学経験のあった母が現地の人と英語で話をする姿を見て「自分も話せるようになりたい」と思ったことでした。当たり前のことですが、インターナショナルスクールの先生は英語しか話ませんし、通っている生徒も中国人や韓国人が多く、友だちとのコミュニケーションも英語が中心。帰国するまでの2年間の学校生活では、多くの時間を英語を使って過ごしました。そのお陰で、入学した頃には聞くことも話すこともできなかった英語が日に日に上達し、帰国する頃には英語でのコミュニケーションにかなり自信を持てるようになっていました。その反面で、約8年間を過ごしたのに、中国語は挨拶程度にしか話せません(笑)学校の勉強では英語ができれば不自由することはありませんでしたが、中国語ももう少し話せるようになっておきたかったです。

## 親切な仲間と先生に囲まれた イメージ通りの学校生活

**中**学2年の6月に日本に帰国することが決まった時は、素直に嬉しかったです。ただ、僕は中学2年まで中国で過ごしていたので、日本で学んでいなければならない小6・中1の学習が抜けているうえ、高校受験に向けた対策も十分ではなかったため、学校選びではいろいろと悩みました。その中から名古屋国際中学校を選んだのは、中高6年一貫の長いスパンで“日本での学習の遅れ”を取り戻そうと考えたから。そして、英語の学習プログラムが充実していることも大きな理由でした。「この学校なら自分が身につけた英語を活かせるかもしれない」。そんな期待を抱いて、名古屋国際中学校に編入することにしました。

入学してまだ数ヶ月しか経っていませんが、この学校を選んで本当に良かったと感じています。クラスや部活動(テニス部)の仲間がとても親切に接してくれ、すぐに学校生活に馴染むことができましたし、ネイティブの先生が多く、何気ない日常の中で自分の英語能力を活かせる環境があることを本当に嬉しく思っています。名古屋国際中学校には、自分に意欲さえあれば英語を使う「機会」はたくさん溢れています。また、僕はこれまで日本の小・中学校に通った経験はありませんが、学校の先生方の親身で丁寧な対応もこの学校の良い点だと思います。僕は数学が少し苦手なのですが、授業で理解できなかったことを質問す



▲「帰国する時に思い描いた通りの充実した学校生活が送れています」と石下大輔君(中高一貫2年生)。

ると、先生方がその場で分かりやすく教えてくださいます。インターナショナルスクールの時は、質問をしてもその回答をもらうまでに時間が空くことも多かったのですが、一人ひとりの生徒に対する“対応の早さ”にはとても感謝しています。そのお陰で、どの教科でも充実した勉強ができ、学んだことがしっかりと身につけていると実感できています。

授業だけではなく、何気ない日常生活を通して世界各国にルーツを持った先生方から、それぞれの文化や考え方を元にしたアドバイスを受けられること、そしてフランクで親しみやすい生徒が多いことが、僕が感じている名古屋国際中学校の魅力。本当に恵まれた環境で、入学前にイメージしていた通りの学校生活が送れています。✪



## A Most Memorable Year in New Zealand

**Kazuto KUNO** (Japan)  
Student in the Senior High School  
International Studies Program

On January 7th of 2012, I traveled to New Zealand with about twenty other students from all over Japan. We were beginning a one-year program of study abroad. I was the only member of our group from Nagoya. The New Zealand Institute of International Understanding (NZIIU) sponsored the program. NZIIU is an incorporated non-profit, charitable trust approved by the Ministry of Education in New Zealand to promote international understanding through overseas student exchanges. The trust has been operating homestay programs for over 20 years and is committed

to educational and cultural exchanges between New Zealand and other countries.

During the twelve-hour flight to New Zealand, I was very excited. I was looking forward to a memorable year abroad. I really expected that the trip was going to be wonderful. My new friends participating in the same program were equally excited, I think.

After the flight, we ate dinner at a KFC. In retrospect, I think that this was a really stupid decision. Why would I eat my first dinner in New Zealand at KFC? I have no idea.

After dinner, we jumped on a bus and drove to Hamilton in the Waikato region. Hamilton is one of the largest cities in New Zealand. My homestay was with a family who lived in a small town called Morrinsville. It's not too far from Hamilton.



Morrinsville was so small that there weren't any chain restaurants like McDonald's or KFC. There were only Mom and Pop bakeries and such. About a month after arriving, I started to attend classes at Morrinsville College. It was a more pleasant experience than I had expected. Not only did I study hard, but I also made a lot of new friends. My friends and I would talk to one another quite a lot during the school day.

New Zealand classes are quite different from classes at schools in Japan. Students and teachers routinely have discussions and debates in class. There is a high level of communication between the teachers and the students and even among the students. This was, for me, quite an impressive way to conduct classes.

I had never eaten New Zealand food before going there to study for a year. To be honest, I fell in love with the food. In fact, I enjoyed eating the

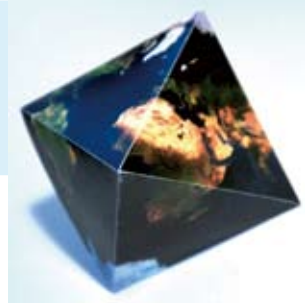


food so much that I got fat! I took about two thousand photos while I was in New Zealand. About one third of them were of meals just before I ate them. That's how much I loved the cuisine.

On December 1st, I left Morrinsville to travel all around the country. I visited many famous cities such as Auckland, Queenstown and Wellington. That was a great experience for me. We stayed at hostels with lots of backpackers. We had to be pretty self-reliant on that trip. We had a lot of freedom and independence.

All in all, 2012 will go down in my personal history as a most memorable year. I learned and grew a great deal. 🇺🇳

# GLOBAL VISION



## Global Citizenship Education

**E**ducation is no longer limited to teaching students how to read, write and count. Education must be transformative. It must bring shared values to the fore. It must nourish young people who actively care about the world and the people with whom we share it. Education must take on, as its central role, the task of helping people to forge a more just, peaceful, tolerant and inclusive world. It must provide young people with the awareness, the skills and the values that they will need if they are to cooperate in resolving the interconnected challenges of the 21st century.

**I**n Japan, schools have traditionally prepared young people to pass exams, to proceed to higher education and to enter the workforce. At our school, we seek to provide our students with the skills and opportunities that they need in order to communicate across

cultures. That is why we require all of our students to travel abroad once every three years and to live with local families. That is why we have aggressively cultivated sister-school relationships and this year have hosted seventy-seven students from our partner schools in Singapore, England, the Philippines, New Zealand, Switzerland and Thailand. That is why we place a premium on teaching our students living English and have hired ten native English teachers to help them achieve fluency in the language.

**E**ducators must help students to intensify their engagement with the whole world, to broaden their understanding of the circumstances that have led to the many challenges that they must face in the near future and to expand their participation in efforts to address and surmount them. Students no longer have the luxury of hiding

and pretending that the challenges confronting the world do not apply to them.

If we want to reach solutions that are acceptable to all of us—solutions that are viable and sustainable—we must do our best to understand each other as distinct elements of a single community. Of course, we may have different histories, cultures, ideals, traditions and goals. But we have no choice but to reconcile them, as we try to live together on a fragile planet whose resources are finite.

Unfortunately, many people are simply not ready to learn about any part of the world that does not seem to have a direct effect on their own daily lives and interests.

A recent poll conducted in the United States indicated shockingly low interest in international affairs. Only about thirty five percent of Americans reported a consistent interest in such affairs. It is unlikely that Americans are unique in this respect. Here in Japan, a

tendency toward parochialism is quite pronounced. The disparity between the information available to young Japanese and the low level of effort they display in engaging this information is a particular problem.

When asked why they expressed indifference about the world, over two thirds of respondents to the American survey said that they lacked the necessary background and education to follow international issues. The implication is that our schools have not provided them with a complete enough understanding of the world to enable them to participate in it.

At our school, we have a strong commitment to global engagement. Whether it's asking our students to participate in a Model United Nations debate in English or sending our students to our many partner schools abroad, we are preparing our students for full, meaningful citizenship in the global community of the 21st century. 🇺🇸

発行 **名古屋国際** 中学校  
高等学校  
NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

所在地 〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町 1-16

発行月 年間4回 (6月/9月/12月/3月)

制作 学校法人栗本学園  
名古屋国際中学校・高等学校  
学内広報チーム

デザイン cluch on cluch Co.,Ltd.

企画協力 株式会社 イーブレイン